

ト ロ ン ト 紀 行

歯学部 香 西 克 之

私は、1989年9月1日より1990年9月20日までトロント大学歯学部口腔細菌学 H.J. Sandham 教授研究室に客員研究員として在籍していました。

私が家族とともにカナダ・トロント市へと旅立ったのは1989年9月1日の夕方です。そして日付け変更線を飛びこえ、14時間後、同じ日の夜、トロント国際空港に到着しました。そこで待っていたのは、employment centerでの長い入国手続きでした。3時間近く待たされ、面接ブースに入った時には、6才の長女は退屈しきっており、3才の長男は周囲の異様な雰囲気不安を感じたのか、泣きわめいていました。その間、出迎いの Sandham 教授と友人は我々が現れるのをずっと待っていて下さいました。翌日は、朝10時に教授が、わざわざ apartment hotel に来て早速、住居探しをして下さいました。時差ボケなど感じる暇もありませんでした。あいにく大学のアパートに空きがなく、新聞広告で良さそうな所を探しては電話で予約を取りつけ、教授の運転する車に我ら家族4人が乗って、アパート巡りです。カナダの住居についての情報は知っていても、実際見るのとは大違いで、townhouse, detached apartment, condominium など種類がたくさんあります。人類のつぼであるトロント市では、街によって住

む人種が少しずつ変わっていること、冬の長いトロントでは、地下鉄が発達し、地下鉄の駅を中心に地下街が広がっていて、郊外でも便利が良いこと、見れば見るほど迷ってしまい、ついに3日間も Sandham 教授を付き合わせることになり、結局、downtown の大学近くの condominium に落ち着くことになりました。教授は、「この3日でもうトロントは見物し尽くしたよ。」と言われましたが、あとで地図でコースをたどってみると、まったくその通りでした。その時カナダは9月1日から3日まで週末と LaborDay で3連休、しかも短い夏の終わりです。例年ならば教授は、cottage でゆっくり書き物でもされているのですが、我々の到来で予定が狂ったようです。それから1年余り、Sandham 教授にはずっと仕事と私事に心配をかけたのですが、Sandham 教授研究室はもとより隣隣の Richard Ellen 教授、Burgess 教授夫妻の研究室のスタッフたちも皆、とても気のいい好意的な人達でした。

トロントは、人口300万人、オンタリオ州の州都で、ケベック州のモントリオールを抜いていまや総人口2,500万人のカナダで一番の都市となっています。果てしなく広がる大地、そして厳しい冬の寒さ。どれをとっても日本とは正反対の環境。それが作り出す国民

性は、現在の日本とはひと味もふた味も違ったもののような気がしてなりません。移民を容認し、多文化国家となることもあえて反対せず、寛容という言葉がピッタリの国です。しかし地理的にはアメリカに接しているため、アメリカとの対抗意識もあるようです。「日本は長い歴史があっていいね。」とよく言われましたが、研究室のスタッフも二世代までさかのぼれば必ず、ヨーロッパや南米、アフリカ、中国などから移住してきたことがわかります。したがって、仕事のことは英語で会話しますが、ランチタイムになると、仏語、中国語が飛び交い、また新聞も人民日報海外版まで持ってくる人もいます。弁当の中身も、千差万別で、近くの食堂街に行けば、どんな国の料理でも安く食べられます。まさに毎日が国際見本市のようなものです。しかしこれほどまで寛容になれば、悩みもおのずと出てきます。今、カナダの国内問題になっている、英仏二言語公用を英語だけに統一しようという動き、あるいは仏系カナダ人の多いケベック州の独立問題、先住人であるカナダ・インディアンの人権問題、また充実した社会保障を負担している高い所得税や消費税への反感などがあります。そしてカナダの人にとっては気にならないことで、日本人の私には異様に映ることもあります。それは資源のムダ使いや公共機関の手続きののろさなどです。例えば、ビルは昼夜電灯がつけっ放し。ピザの延長には、一朝4時から並ばなければならなかったし、車の免許に至っては、路上試験を待つのに2か月と、おかげで忍耐強くなりました。

英語に関しては、娘と妻がめきめき上達し

たのに比べ、私と息子はどうも日本語の方が性に合っているようで、クシャミをしたときの“Excuse me.”のタイミングを覚えるのに半年ほどかかりました。

私は広島大学では小児歯科に所属しているので、トロント大学歯学部臨床科も少し覗いてきましたが、日本の歯学部とは様相が幾分異なっています。まず歯学部臨床の常勤の先生が少ないことです。個々で病院勤務をしていたりオフィスを持っていて、学生教育の担当日だけ出向してくるわけです。学部の中にはclinicがあって、そこで学部学生は診療を行います。またResearch clinicがあり、ここでは研究のための診療を行っています。歯学部に隣接して立ち並ぶ、Hospital for Sick Children, General Hospital, Mt. Sinai Hospitalなどの大病院には、各専門の歯科が置かれ、主にhome doctorからの紹介患者や全身麻酔を必要とする患者がやって来ます。また研修医もここで腕を磨きます。こんな中で特に印象づけられたのは、研究室あるいは診療科、さらには学部間の横の関係が非常に自由だということです。ほとんど毎日、早朝や夕方に学部や病院で軽食付きのセミナーがありますが、分野を問わず、大勢の先生や学生がやってきます。私も数回参加しましたがそこで出るピザやドーナツの費用はどこから出るのか不思議でした。実験を行うときでも、他の研究室との間での器具の貸し借りや、実験の相談は日常茶飯事です。さらに研究員は、マスターキーを持っているのでいつでも実験室に出入りできます。マスターキーを持っている人達が他にもいます。それは毎日夕方5時に始まる掃除のおじさん、おばさんたちです。

実験室はもちろん、教授室の中まで隅々まできれいにしていきます。各階で3人ずつが、11時ごろまでやっていますが、ほとんどがフランス系のケベック州の人達でした。

これだけ広い国で多くの人種が住んでいれば多少の問題は出てきますが、福祉や公共施設の完備など生活の基本となるものは、日本より充実しているし、広い視野に基づいて行われていることがうかがわれます。歯科分野でもまず予防が優先されています。すでにオンタリオ州の人口の55%がフッ素添加の上水道を使用しており齲蝕予防に効果を上げています。おかげで研究室の実験では、常にフッ素除去した水を使わなければなりません。

私がいたわずか1年余りの間だけでも、東ヨーロッパの改革、湾岸危機など世界は大きく変化しつつありますが、研究室でもいろいろな国籍の人たちがいるだけに、毎日のように政治問題が話題となりました。またそれぞれの国での医療についても話が尽きませんでした。

カナダでも、日本製のカメラ、電気製品、車であふれていましたが、経済大国となった

日本に帰った今、狭い自宅から混雑した道を通い、「米が高い、野菜も高い。」と妻が言いつつ料理した遅い夕食を食べながら、はるか彼方でそれぞれの目的で研究に励んでいるだろう友人たちを懐かしく思いおこすのです。そして、留学生や外国からの来客を迎えるとき、日本の物質面以外の豊かさをどこで証明したらよいただろうとふと考えてしまいます。研究の成果も得られましたが、それと同時に日本を見つめ直すという意味でもとても収穫の大きかった海外生活でした。

(写真は、Sandham 教授夫妻と私たち家族で、週末にスキーを兼ね、教授の cottage に行ったときのものです。)

